

だれにも話さなかったこと

小川未明

青空文庫

あのときの、女の先生は、まだいらつしやるだろうか。それにつけ、僕は、深く心にのこつて、忘れられない当時の思い出があります。

しばらく、さくの外に立つて、もう一度そのときのことを頭にえがき、自分の子供の時分をかえりみました。

どちらかといえば、僕は、内弁慶で、外では弱虫というのでしょうか。幼稚園へも、なかなか一人ではいけなかつたのでした。

「姉さん、ついて行ってよ、それでなけりや、いや。」と、いざ朝になつて、いくときになると、いいはりました。

「じゃ、こんどだけ、いつしよにいつてあげましようね。」と、姉^{あね}は、ついていつてくれました。

家^{いえ}を出^でると、さびしいけれど町^{まち}になります。お菓子屋^{かしや}や、くだもの屋^やや、酒屋^{さかや}や、薬屋^{くすりや}などがあつて、角^{かど}のところにある、ラジオ屋^やの前^{まえ}をまがると、細^{ほそ}い道^{みち}となります。

その道^{みち}をいくと、じき、幼稚園^{ようちえん}のところへ出^でるのでした。門^{もん}の前^{まえ}までくると、立^たちどまつて、

「さあ、お入^{はい}りなさい。姉^{あね}ちゃんは、もう帰^{かえ}つていいでしょう。」と、姉^{あね}は、いいました。

もう、校舎^{こうしゃ}の入^いり口^{ぐち}には、きのう、いつしよに遊^{あそ}んだ、子供^{こども}たちが二、三人^{にん}もかたまつて、僕^{ぼく}のほうを見^みて、なにか話^{はな}しあつ

て、笑わらっています。きつと、弱虫よわむしとでもいつていたのでしょう。そう知りしつつも、僕ぼくは勇気ゆうきを出だして、一人ひとりで入はいることができなかつた。それどころか、ますます、悲かなしくなつて、姉あねの手てをひき、「お姉ねえちゃんも、いっしょでなければいや。」と、泣なかんばかりに、いいました。

姉あねは、なんと思おもつたか、いやなようすもみせず、笑わらいながら、「しかたがないのね、じゃ、いっしょに入はいりますよ。」と、いつて、門もんを入はいりました。

僕ぼくのたのみなら、なんでもよくきいてくれる、やさしい姉あねは、教きょう室しつの中なかへも、いっしょに入はいつて、先せん生せいのお話はなしを聞きいていました。

僕^{ぼく}たちは、教^{きょう}場^{じょう}の中^{なか}で、教^{おそ}わるよりも、外^{そと}へ出^でて、広^{ひろ}場^ばで遊^{あそ}んだり、うたったりするときは、僕^{ぼく}が多^{おほ}かった。しかし、僕^{ぼく}には、内^{なか}に在^あるほう^{この}が好^{この}ましく、外^{そと}へ出^でて、みんなといっしょに手^てをつなぎ合^あつて、遊^{ゆう}戯^ぎをしたり、うたったりするのが、なんとな^く、はずかしい氣^きがして、好^すかなかつたのです。

それは、二人^{ふたり}ずつ、ならんで、たがいに手^てをとりあつて、うたいな^いながら、桜^{さくら}の木^きのまわりを歩^{ある}いたときでした。

「ごらんなさい。姉^{ねえ}ちゃんみたいな大^{おお}きな人^{ひと}は、だれもはいっていませんよ。みつともないでしょう。あんたも、これからお友^{とも}だちと、いっしょにならんで、お歩^{ある}きなさいね。」と、姉^{あね}は、小^{ちい}さな声^{こゑ}でいいました。

子供こどもに、大人おとながついてきたのは、僕ぼくばかりでなかった。ほかの
 子供こどもにも、母親ははおやや、姉あねなどが、なにぶんあがつた当座とうざのことで、
 ついてきたけれど、たいていは、教室きょうしつの外そとにいたし、運動うんどう
 するときは、列れつの外そとに立つて、はなれて見ていたものです。しか
 るに、僕ぼくだけは、遊戯ゆうぎをするにも、姉あねといっしよでなければ、し
 ないといつたので、しかたなく先生せんせいもゆるして、姉あねは歩くとき、
 列れつへ加くわわりました。

その日ひのことを、よく覚えています。ちようど、桜さくらの花はなが咲さき
 かけていました。子供こどもたちの列れつは、この桜さくらの木きのまわりを、先せん
 生せいの号令ごうれいに従したがって、歩あるいたのです。

僕ぼくは、こんなに、心こころのあわただしい間あいだにも、自分じぶんの観かん察さつとい

うものをおこたりませんでした。僕^{ぼく}たちの、女^{おんな}の先生^{せんせい}が、姉^{あね}といくつも年^{とし}のちがわないうことを知り^しました。これは、さいしよに僕^{ぼく}の心^{こころ}をおどろかした発見^{はっけん}でした。

つぎに、姉^{あね}が、先生^{せんせい}のいわれるとおりに、僕^{ぼく}たちといつしよになつて、歩^{ある}いたり、手^てをうごかしたり、うたつたりしているのを見^みたときです。

僕^{ぼく}は、かつと顔^{かお}があつくなつて、ただこうしては、姉^{あね}がみじめな気^きがして、家^{いえ}へ歸^{かえ}るといい出^だしました。

「どうして、急^{きゆう}にそんなことをいうの。」

姉^{あね}は、あきれて、困^{こま}つてしまいました。そして、僕^{ぼく}のわがままに、どれほど苦^{くる}しんだかしれぬというのは、そう暑^{あつ}い日^ひでもなか

つたのに、姉は額あねぎわに汗あせをにじませていたのです。

先生の顔かおを見ると、僕は、いつそうだだをこねました。先生せんせい

生せいが、なにかいえばいうほど僕は、帰かえるといいはりました。そして、とうとうそのまま家いえへ帰かえってしまいました。

僕は、元げん気なく、だれにもなにもいわず、ただふきげんでした。

「姉ねえちゃんは、はずかしくつて、もういつしよになんかいかせさんよ。」と、姉あねは、家いえへ帰かえると、この日ひばかりは、おこってしまいました。

「いいよ、僕は、あしたから、一人ひとりでいくから。」

僕ぼくが、こういつたとき、家うちの人ひとたちは、そんな弱よわ虫むしが、どうして、一人ひとりでいけるものかといって、笑わらいだしました。

こうした周囲しゅういの空気くうきは、僕ぼくをして、偶然ぐうぜんにも心こころに深く感じかんじたいつさいを打ち明あける機会きかいをば、永えい久きゆうにうしなわしてしまつたのでした。

しかし、その翌よくじつ日から、僕ぼくは、いったとおりに、だれにも、送おくつてもらわず、一人ひとりで幼稚園ようちえんへいき、また一人ひとりで帰かえりました。

「どうして、そんなに、強つよくなつたの。」と、家いえじゆうのものがふしぎがったり、おどろきの目めをみはつたりしました。

「きつと、いいお友ともだちが、できたのでしよう。その、お友ともだちのてまえ、お姉ねえさんに、つれていってもらうのが、はずかしくなつたのですよ。」と、下したの姉あねが、いいました。

もとより、だれも、僕ぼくの気持きもちのわかるはずはありませんでし

た。また、僕は、自尊心から、自分が弱虫なばかりに、姉を
 はずかしめて、気の毒に思つたことを、だれにも語る気になれま
 せんでした。いつしか、月日はたつてしまいました。その後、姉
 は、嫁にいつて、もう家にはいないのです。それゆえ、あるいは、
 姉にも、あのとときの、僕の気持ちも永久に語る機会はないか
 もしれません。

だが僕は、あの日、いつしよに遊戯をしてくれた、姉のすがた
 を思い出すと、これから後、どんな苦しいことにも忍耐できる
 気がする。過ぎた日のことを思い出して、かぎりなきなつかしさ
 と、悲しさを感じるのでした。僕は、いくたびも、幼稚園の、
 小さな校舎と桜の木をふりかえりながら、細い道を歩いて、い

つしかそこを遠とおざかりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

※表題は底本では、「だれにも話《はな》さなかつたこと」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年7月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

だれにも話さなかったこと

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>